

歴史から探るつくばの周辺市街地の「陰」

～大曽根～

2019 年度都市計画実習

都市計画史班最終レポート

班長：谷野今飛	副班長：川又豪士
DB：柏原義央	印刷：有水瑛美
書記：柴田明日香	渉外：江原輝
担当教員：松原康介	TA：橋本涼汰

目次

第1章 序論

- 1.1 実習の背景と目的
- 1.2 作業のフレーム
 - 1.2.1 長ぐつと星空
 - 1.2.2 文献調査
 - 1.2.3 議論・仮定
 - 1.2.4 フィールドワーク
 - 1.2.5 ヒアリング調査・文献調査
 - 1.2.6 議論・ストーリー完成

第2章 本論

- 2.1 導入・問題提起
 - 2.1.1 パリ改造における表と裏の形成
 - 2.1.2 市役所の見る大曽根の現状
- 2.2 大曽根の歴史
 - 2.2.1 大曽根の基礎データ
 - 2.2.2 研究学園都市計画執行以前の大曽根
 - 2.2.3 大曽根の街路形態
 - 2.2.4 大曽根に住んでいた人々
 - 2.2.5 大曽根における新旧住民の分断
- 2.3 地図から見る道路の変遷
- 2.4 大曽根の現状
 - 2.4.1 大曽根と花畑地区の関係
 - 2.4.2 近隣住区論について
 - 2.4.3 近隣住区論における大曽根と花畑地区の比較
 - 2.4.4 大曽根の問題

第3章 結論

- 3.1 まとめ
- 3.2 今後の課題

第4章 参考文献・謝辞

- 4.1 参考文献
- 4.2 謝辞

第1章 序論

1.1 実習の背景と目的

現在のつくば市の研究学園都市地域からは想像しづらいが、ほんの50年前までつくば市は自然豊かな農村地域であった。「長ぐつと星空」からはつくば市の劇的な変化の中で生きる住民たちの苦労がうかがえた。

住民の生活の中で特に大きく変化したものの1つは交通である。学園東大通りや学園西大通りを中心とした多車線で交差点の少ない幹線道路が研究施設を取り囲むように敷かれ、都市開発もそれらの周辺を中心に行われてきた。研究学園の成り立ちを見るにあたって幹線道路の周辺地域が重要な舞台となるのは間違いないだろう。

1.2 作業のフレーム

1.2.1 長ぐつと星空

初めに研究学園都市計画以前のつくばの様子を知るべく「長ぐつと星空」を読み、興味をもった箇所を取り上げかつてのつくばの暮らしへの理解を深めた。

1.2.2 文献調査

どのような過程で研究学園都市計画が進められたか知るべく文献調査を行った。

1.2.3 議論・仮定

文献調査や年代別地図比較等を通じてつくばの交通は大きく変化していったことがわかり交通に焦点を当てて議論を進めることにした。

1.2.4 フィールドワーク

かつてつくばには筑波鉄道という路線が存在し、昔は筑波鉄道沿線に中心地が点在していたことが分かった。かつての中心地がどのような姿になっているか知るべく筑波鉄道の旧常陸小田駅、北条駅等に赴いた。

さらに現在の東大通りの近くに明治以前から存在する大曽根という集落があることがわかりフィールドワークを行った。

1.2.5 ヒアリング調査・文献調査

大曽根地区のすぐ近くに開発地域が広がっており一見、研究学園都市計画から取り残されているかのように見える大曽根地区に興味を持った我々は大曽根地区で現地住民にヒアリング調査を行った。

1.2.6 議論・ストーリー完成

東大通りのすぐ近くに位置しているにもかかわらず大曽根地区は研究学園都市計画によって衰退してしまったことがこれまで調査で分かった。かつての中心地が開発地域の裏に隠れてしまった姿に焦点を当て議論を進めていった。

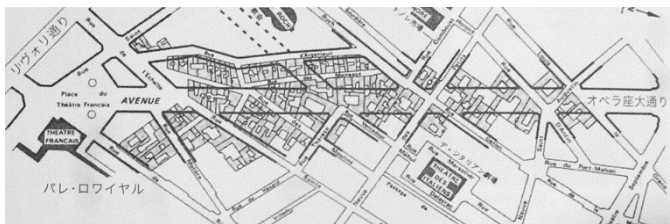
第2章 本論

2.1 導入・問題提起

2.1.1 パリ改造における表と裏の形成

大通り建設に際する裏表の出現の過去の一例を挙げる。19世紀半ば頃にパリで大規模都市改造が行われた。当時のパリの路地は細く入り組み、光や風が通らないため衛生環境が非常に劣悪であったため、これを解決すべく幅員の広い大通りの建設が計画された。大通りの計画地に重なる建物は強制的に取り壊された（スクラップアンドビルド）。大通りは美しく整備され、パリは「世界の首都」として発展していくのだが、その裏で無秩序に破壊された旧市街地は放置されたままであった。当時のスイスの建築史家のジークフリート・ギーディオンはその著書「空間・時間・建築」で改造後のパリを「まるで衣装棚のように、画一的な大通りの裏側にあまりにもひどい乱雑さが隠されている」と批判している。

都市機能向上の裏に完全に取り残される形となってしまったパリの未開発地は大通りの陰となり明確な「表」と「裏」の関係が完成してしまった。つくば市の東大通りなどはパリ改造ほどの強引さはないものの、大通りとその裏の未開発地との格差を生んでいる可能性は十分にある。



新しく作られる大通りとその裏側の旧市街

2.1.2 市役所の見る大曽根の現状

まず大曽根の現状を把握するために、つくば市役所が作成している「大曽根市街地カルテ」を参考にしたところ、市役所の大曽根に対する解釈と実情がずれている可能性があることがわかった。

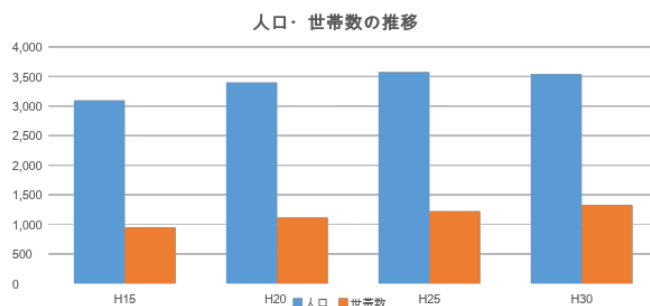
「大曽根市街地カルテ」によると、大穂地区の43%が大曽根に食料品を買いに、40%が日

用品を買いに来ていると記載されている。しかし、我々の大曽根の商店でのヒアリング調査では「客足は減ってしまった。」「この通り（県道 128 号線）は昔大曽根銀座と呼ばれるほど活発だったが、今はほとんど店が潰れてしまった」という声を聞いた。これはカルテの内容と矛盾している。

このことから、市役所の調査によるデータは、大曽根地区への買い物客だけではなく、実際には隣町の花畑地区への客数も含まれているのではないかと推測できる。ここで私たちは、市役所が大曽根という昔の地名を使って花畑地区を表していることを問題視した。

2.2 大曽根の歴史

2.2.1 大曽根の基礎データ



筑波大学から北に約 5km に位置し、古くからの街道である県道 128 号線に沿って広がる市街地である。西側を東大通りが走り、その周辺は新興住宅地や新しい店舗、開発前の名残である畑がある。大曽根の東側の低地には水田が広がり筑波山も見据えている。近年では子育て世代の入居も増えてきている。

2.2.2 研究学園都市計画執行以前の大曽根

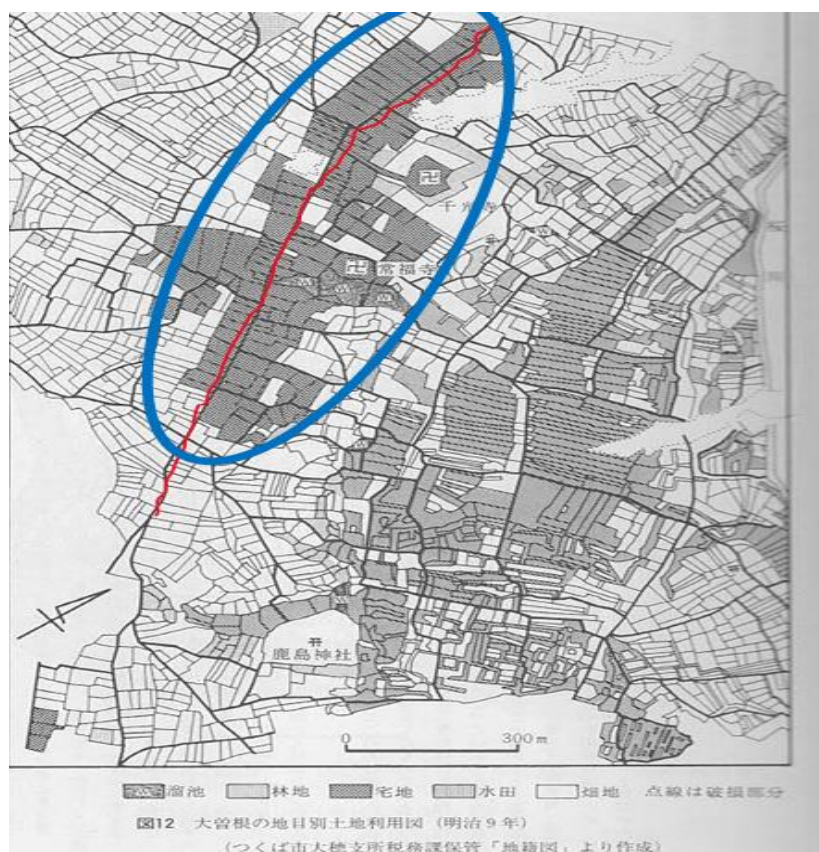


大曽根は研究学園都市計画が行われるまで、大穂地域の中心的な役割を持っていた。大曽根地区には行政、教育の拠点が置かれたほか、大曽根銀座と呼ばれた商店街を有し、商業の中心としての役割も担っていた。

2.2.3 大曽根の街路形態

現在の大曽根の街路形態は江戸時代の宿場町や市場町といった商業集落に見られた街村の街路形態に由来している。街村とは主要道路に沿って民家が密集して並立するという特

徴を持つ。下の地図は明治 9 年の大曽根の地図だが赤線の道を中心に宅地が広がっている様子が見られる。実際に宝永 4 年の村明細帳によれば、江戸時代、大曽根地域は市場町として栄え、定期市では木綿、雑穀などが売買されたそう。戦後も大曽根地域にはこの主要通りに沿って 70 店舗が存在し、その盛況ぶりからこの通りは大曽根銀座と呼ばれていた。しかし地域の高齢化、大型スーパーの登場等が原因となり、現在では 70 あった店舗も 3 店舗に減少してしまった。この地域の商業的側面はほぼなくなってしまったといえる。一方、この地域の街路形態は現在でも街村の形を残しており、時代に取り残された印象を受ける。



大曽根地域の地目別土地利用図（1876 年）
（大穂町史より抜粋）

2.2.4 大曽根に住んでいた人々

大曽根地域は市場町として商業的側面が強かった地域だが、大曽根に住む人々は基本的には農家としての生活を送っていた。農家という職業上、自然とのかかわりが強く自然や神仏への信仰心が深かったといえる。実際に大曽根地域にはかつて神社が 22 社、寺院が 5 寺存在していた。しかし戦後神仏崇拝が弱まり、それらの多くは消滅または移転されてしまったが、現在でも千光寺、浄福寺、加島神社などが存在している。戦前にはこれらの寺社仏閣を拠点に、祭り、神仏活動が盛んに行われており、寺社仏閣が人々の交流の場としての役割も担っていた。



大曽根地域の地目別土地利用図（1876 年）
（大穂町史より抜粋）

2.2.5 大曽根における新旧住民の分断

今と昔に共通して存在する大曽根に根付いた事象としては新住民と旧住民の分断が見られる。過去の事例としては若衆制度における新住民への排他性があげられる。この制度は江戸時代から昭和の戦時中まで続いた。若衆とは村の神仏行事の運営をする役職で、家の家長となる男子は 20 歳になると加入する仕組みだった。しかし、この制度は新しく移住してきた新住民には適用されず、旧住民と新住民には一定の距離があったことが分かる。

一方現代においても大曽根での現地でのヒアリング調査から大曽根には新住民と旧住民が分断している状況が見られた。大曽根で育った旧住民の間では、定期的に公民館で集会が行われるそうだがそこには研究学園都市計画以降大曽根に入ってきた新住民が入ってくることはないという話があった。また、旧住民の方々の意見として新住民とは関わるつもりがないという趣旨の多く耳にした。

このように大曽根地域には旧住民と新住民の分断の歴史があり、それは研究学園都市計画以後も続いていることが分かる。

2.3 地図から見る道路の変遷

図 1 は現在の地図(2013 年)の道路を成立年代別に色分けしたものである。青線部は 1960 までに成立した道路、赤線部は 1960 年～1977 年に成立した道路、緑線部は 1977 年～1995 年に成立した道路、黄色線部は 1995 年～2013 年に成立した道路となっている。また、東大通り、西大通りは分かりやすいように紫線に色分けしており、東大通り・西大通りの成立年代は 1977 年～1995 年である。

図 2 は 1960 年の地図である。1960 年の地図に記載されている道路のうち現在の地図にも記載されているものは青線部であり、大曽根土浦線と大曽根地区内の一部のみとなっており現在でもつかわれているものは少ない。また、現在の東大通り、西大通りの大部分は雑木林であり、土地買収や工事等が行いやすい場所を選んだと考えられる。

図 3 は 1977 年の地図である。現在の地図にも記載されている道路は図 1 の赤線部となっている。このころには東・西大通り（紫線）が成立しており、研究学園都市計画にみられる近隣住区論に基づいた街の構造が見て取れる。東大通り側の花畑周辺から開発されており、この理由としては旧市街地の蓮沼地区があり西大通り側の開発は土地の買収等が必要であり、難しかったからだと思われる。

図 4 は 1995 年の地図である。大曽根地区の外側には薬師町や鹿島台といった開発地域が見られる。さらに、東・西大通り内の西大通り側の開発が始まっており、この頃ようやく蓮沼地区開発の算段が付いたと推測できる。

1995 年～2013 年までに作られた道路は図 1 の黄色線である。この頃には東・西大通り内の開発が完了しており、スーパーや飲食店等が作られていることもわかる。大曽根地区と開発地区をつなぐ道路が増やされていることがわかるが、現地を歩いた感想からすると足りないのではないかといった印象を受けた。

年代別の地図を比較した結果、大曽根の周囲は開発されて行っているのに対し、大曽根が取り残されて行っていることが見て取れた。



図 1



図 2



図 3



図 4

2.4 大曽根の現状

2.4.1 大曽根と花畑地区の関係

大曽根は江戸時代以前から周辺地区の中心として県道 128 号線に沿って形成された集落であったが、現在大曽根に住む人々の生活インフラは東大通りを挟んだ花畑地区にあり、生活の中心地は花畑地区に移ってしまったということが分かった。花畑地区、ないしつくば研究学園都市は「近隣住区論」をもとつくられた地域、都市である。そこで今回は大曽根地区と花畑地区を近隣住区論の観点から比較を行った。今実習では近隣住区論的な街並みがみられる花畑、筑穂、蓮沼地区を総称して花畑地区とした。

2.4.2 近隣住区論について

近隣住区論とはアメリカの社会・教育運動家、地域計画研究者のクラレンス・A・ペリー (Clarence Arthur Perry:1872~1944) によって提唱された理論で、都市の匿名性、相互の無関心などの弊害をコミュニティの育成によって克服することを目的とした理論である。



ペリーの近隣住区ダイアグラム

近隣住区論には6つの原則がある。

①規模②境界③オープンスペース④公共施設用地⑤地域の店舗⑥地区内街路体の6つである。以下の表は各要素について説明を加えたものである。

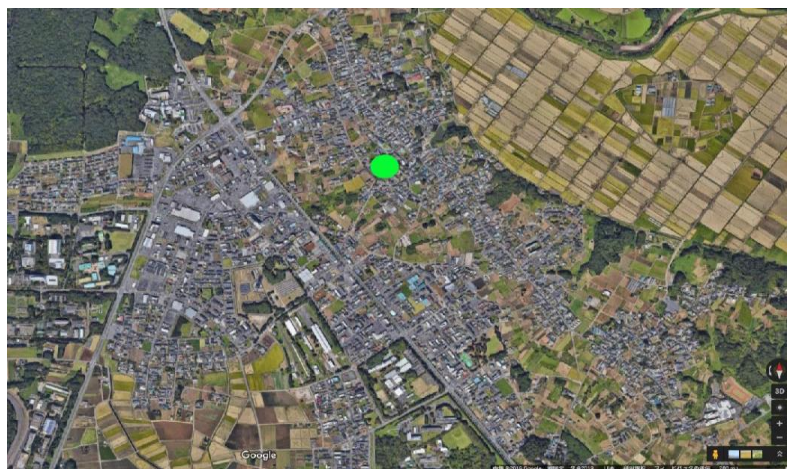
筑波研究学園都市も近隣住区論を取り入れて都市計画が行われた。例えば学園東大通りは6原則の境界に当たる。

規模	近隣住区の開発は、通常小学校が1校必要な人口に対して住宅を供給するものであり、その実際の規模は人口密度に依存する
境界	住区は通過交通の迂回を促すのに十分な幅員をもつ幹線道路で周囲をすべて取り囲まなければならない
オープンスペース	特定の近隣生活の要求を満たすために計画された小公園とレクリエーションスペースの体型がなければならない
公共施設用地	住区の範囲に応じたサービス領域を持つ学校その他の公共施設は、住区の中央部か公共広場の周りに適切にまとめられていなければならない
地域の店舗	サービスする人口に応じた商店街地区を1箇所またはそれ以上つくり、住区の周辺、できれば交通の接点か隣の近隣住区と同じような場所の近くに配置すべきである
地区内街路体	住区には特別な街路体型が作られなければならない。住区内は循環交通を促進し、通過交通を防ぐように全体として設計された街路網が作られる
近隣住区論の6原則	

2.4.3 近隣住区論における大曽根と花畑地区の比較

①規模

小学校は両地区合わせて大曽根小学校のみとなっている。近隣住区論の観点から見ると花畑地区に小学校があるはずだが、現在も大曽根地区に学校がある。詳細は分からないが都市計画の段階で両地区の交流を狙ったと考えることもできる。もしそれが正しいとすれば、その狙いは現在の時点では達成されていないといえる。



両地区における小学校の位置

②境界

花畑地区は東大通りと西大通りに囲われた地区でこの 2 つの道路が幹線道路の役割を果たしている。一方大曽根地区は、県道 128 号に沿って集落が形成されているため、集落の中を道路が縦断する形になっている。道路に沿った地域編成は昔からある地区の特徴なので、大曽根が歴史の深い地域であることが分かる。またこの道路配置によって花畑地区では通過交通が抑制され、大曽根地区では通過交通が多いと考えられる。



花畑地区における幹線道路



大曽根地区における幹線道路

③オープンスペース

公園は花畑地区に集中していることが分かった。大曽根地区には 1 つしか存在しない。またヒアリング調査から「子供たちが気軽に遊べる公園がほしい」といった声が挙がった。このことから近隣住区論にあるレクリエーション施設の数に差があることが分かる。



花畑地区における公園の分布



大曽根地区における公園の分布

④公共施設用地

今回は公共施設と病院の分布について比較した。

公共施設について、大穂地区の公共施設は花畑地区の旧大穂中学校の場所に集まっていることが分かる。一方大曽根には 1 箇所しかなく、大曽根の人が花畑の施設を利用するためには東大通りを越えなくてはならない。ヒアリングからも「施設が遠い」という声が挙がっていた。近隣住区論的に施設はまとまっているが東大通りが通行の邪魔になっている可能性がある。



花畑地区における公共施設の分布



大曽根地区における公共施設の分布

次に病院の分布について比較する。病院についても花畑地区に多くが集まっていることが分かった。大曽根地区にも 2 箇所病院は見られるが両方とも歯科医院と利用が限定的であると考えられる。したがってここでも花畑地区への機能の集中、地域間の医療能力の差が見られる。



花畑地区における病院の分布



大曽根地区における病院の分布

⑤地域の店舗

大曽根にはかつて商店街が存在し、その特性を残した牛乳屋や洋品店などの専門店が点在しているが、それらだけでは日常生活を送るには不十分である。日常生活に満足するための商品を得るためには花畑地区に行く必要がある現状になっていることが分かる。このことも大曽根地区の人々が車に依存した生活を送っている 1つの要因であると考えられる。



花畑地区における商業施設の分布



大曽根地区における商業施設の分布

番外編

今回近隣住区論の 6 原則にはないのだが各地区の住居について比較を行った。その結果大曽根地区には昔ながらの大きな住居が多く見られ、花畑地区ではモデルハウスのような新築が多く見られた。新住民が花畑地区に多く集まっていることがこのことから分かる



花畑地区において多く見られた住居タイプ



大曽根地区に現存する住居

2.4.4 大曽根の問題

前の項目の「市役所のみる大曽根の現状と問題意識」で取り上げた通り、市役所の大曽根に対する解釈と実情がずれている可能性があることがわかった。この章では、さらに市役所の「大曽根市街地カルテ」を調査していく中で発見した、大曽根の現状について述べる。

「大曽根市街地カルテ」では、商業施設や医療機関において半径 800m を徒歩圏として、大曽根地区で徒歩圏のカバー率が高いことから、大曽根地区の日常生活サービス施設充実度が高いとしている。しかし、徒歩圏半径 800m に入るすべての人の充実度が本当に高いのか、徒歩圏の観点から見直してみた。

まず徒歩圏とは、歩いて移動できる範囲を指し、国土交通省の調査によると、75 歳以上の高齢者の半数が無理なく休まず歩ける距離は 800m としており、残りの半数は 800m の徒歩移動は辛いとしている。また他の論文内では徒歩圏を 400m としているケースが多く（金、小林、姫野、金、佐藤、2011）、つくば市の設定する半径 800m は大きいと言える。また、谷（1977）によると「通常の幹線道路に関しても同様な計量化（線路などによる徒歩圏の分断の計量化）が可能である」とあり、東大通りで分断される大曽根と方で花畑を一つの地区としてみることは難しいであろう。

これらを踏まえて、徒歩圏を半径 400m に変更し、市役所と同じ方法で大曽根地区の日常生活サービス施設充実度を測った。その結果、商業施設、公園、公共施設、病院のそれぞれの施設に共通して、徒歩圏半径 400m に設定すると、カバー率は著しく低くなることが分かった。このことより、車を持たない人や免許を返納した大曽根地区の高齢者にとって、花畑にある各施設は利便性が低いと言える。大曽根地区は車があれば生活しやすい街であるが、将来性を考えると厳しい現実にあることがわかった。



商業施設 800m



400m



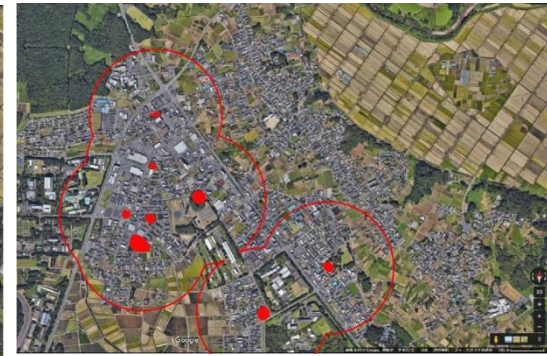
公園 800m



400m



公共施設 800m



400m



病院 800m



400m

第3章 結論

3.1 まとめ

東大通り・西大通りに囲まれた花畑地区は近隣住区論にのっとったまちづくりがなされていると考えられる。その一方、大曽根地区は昔ながらの集落の形が残りながらも、町の機能を満たす施設が不足しており、都市開発の有無で地域格差がみられる。かつての「表」であった大曽根地区が現在では「裏」となり、かつての「裏」であった花畑地区が現在の「表」となっていったことが今回の調査で分かった。

今までの大規模都市計画において今回のような調査に例がしばしばみられ、今後の大規模都市計画においては開発地域周辺の旧市街地目に向けることも重要になっていくのではないだろうか。

3.2 今後の課題

今回の調査を通じて現在の大曽根地域における様々な課題が見えた。旧住民と新住民の確執の解消、公共交通の整備、大曽根花畑間の連絡の向上等の問題が挙げられる。これらを解決すべく行政、住民が一体となって解決に向かう姿勢が大曽根の今後を大きく左右していくことだろう。

第4章 参考文献・謝辞

4.1 参考文献

筑波研究学園の生活を記録する会(1981)『長ぐつと星空：筑波研究学園都市の十年』ふるさと文庫

筑波研究学園の生活を記録する会(1985)『続・長ぐつと星空：筑波研究学園都市のその後』ふるさと文庫

筑波研究学園都市施設記録写真集刊行委員会(1982)『写真集 筑波研究学園都市』

筑波研究学園都市官庁営繕事業記録編集委員会(1981)『筑波研究学園都市官庁営繕事業記録』

三井康壽 (2015)『筑波研究学園都市論』

財団法人 日本地図センター (1996)『地図で見るとつくば市の変遷』

茨城県地名大辞典 筑波郡郷土史 (1989)『大穂町史』

岡村安久 (1983)『大曽根雑記 山村生活の伝承』ふるさと文庫

岡村安久 (1990)『大曽根雑記 山村生活の伝承,続』ふるさと文庫

常陽新聞社 (2001)『つくば報道 続 筑波研究学園都市概成 20 周年記念』

つくば市 HP：周辺市街地の振興に向けた取り組み

<https://www.city.tsukuba.lg.jp/jigyosha/machinami/shuhen/1002156.html>

李召熙:高齢者の居住分布と生活サービス施設への接近性.2012.2

http://gis.sk.tsukuba.ac.jp/2009-12_GIS-SA/20120218/lee.pdf

谷 明良:徒歩圏分断の計量的把握に関する基礎的考察. 1977.11

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscej1969/1977/267/1977_267_89/_pdf/-char/ja

金晃漢,小林裕司,姫野由香,金俊榮,佐藤誠治:生活利便性から見た住宅団地の持続可能性.2011.5

https://www.jstage.jst.go.jp/article/aija/76/663/76_663_939/_pdf/-char/ja

海道清信:人口密度指標を用いた都市の生活環境評価に関する研究.2001

https://www.jstage.jst.go.jp/article/journalcpj/36/0/36_421/_pdf/-char/ja

国土交通省:高齢者の生活・外出特性について

<http://www.mlit.go.jp/common/001176318.pdf>

4.2 謝辞

今回の実習を行うにあたってたくさんの方のご支援をいただきました。

つくば市都市計画部市街地振興課周辺市街地振興室の皆様

大曾根地区でのヒアリング調査にご協力していただいた皆様

調査にご協力いただき誠にありがとうございました。